

アユ人工配合飼料の研究（要旨）

岡 彬・菅生 裕・戸田久仁雄・高橋昭夫

全国湖沼河川養殖研究会アユ初期飼料研究部会では、ふ化後60日前後（全長25mm）からの健全な種苗を育成するための人工配合飼料の開発を目的として、関係機関による連絡試験を実施しているが、本年度はこれまでの飼料をもとに、油脂の添加が仔魚の成長、生残あるいは体形異常の発生防止にどのような効果をもつかについて試験を実施した。本試験の結果については、アユ初期飼料研究部会「初期人工配合飼料の研究」昭和56年度連絡試験結果報告書としてすでに報告されているので、ここでは要旨のみを記載する。

1. 試験区として、基本飼料区（1区）、油脂3%添加区（2区）、油脂6%添加区（3区）を各2槽ずつ設けた。
2. 供試魚はふ化後55日を経過した平均全長27.8mm、平均体重45mgのもので、0.5トンパンライト水槽6面に各1,000尾ずつ収容し、人工汽水の循環濾過方式により60日間飼育した。
3. 1区と2区の間では餌の物性に大差なく、当初から浮上してよく摂餌していた。3区の餌は1.2区の餌に比べて大きさにばらつきがみられ、投餌直後に沈降するものがあった。
4. 1区の2面では肝白濁魚が多数認められたが、へい死には至らなかった。その他特に目立った疾病、へい死はみられなかったが、3区の2面で友喰いがみられた。
5. 生残指数と増重指数の相乗積から1区を100とした場合の各区の指数を算出したところ、2区は114、3区は84となったことから、油脂の添加がアユ仔魚の生残、成長に効果があったとはいえないが、1区で肝白濁魚が多数みられたのに対して、2区、3区でまったく出現していないことから、この面での効果はあったものと考えられた。